

報告

講演録

『オートエスノグラフィー・マッピング： 「私」からはじめる研究手法を知るための地図』

発行：2026年3月31日

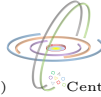
土元 哲平 (立命館大学)

抄 録

本報告は、『オートエスノグラフィー・マッピング』を題材とした、第26回ものづくりと質的研究センター読書会(2025年10月30日)の講演録である。オートエスノグラフィー(AE)は、個人的経験と文化的文脈とを結びつける方法論ないしアプローチであり、表象の危機を経て生み出された。AEを通して、研究者は主体的に自身や、仲間の人びと(own people)の経験を探究していく。2000年代以降、喚起的・分析的・批判的・協働的など多様な種のAEが展開され、その全体像を捉えることが困難になっていた。本講演では、まず「マッピング」の含意について説明し、AEの拡がりや二次元の座標軸上に位置づけることで俯瞰的に理解する試みを解説した。横軸に「共同性-特異性」、縦軸に「公正-変革-発見-生成」を設定し、これらを成分分解した軸を用いることで、8つの主要なアプローチの関係性を可視化した。さらに、AEの歴史的展開、マッピング作成の2年間の過程、AEにおける「自身の生に根ざした表現」という中心概念についても論じた。本マッピングは分類のための構造ではなく、AE研究の地形とともに変わっていく可能性を含んだ動的な地図として位置づけられる。

キーワード：オートエスノグラフィー、マッピング、自身の生に根ざした表現、仲間の人びと、主観性と科学

連絡先：土元 哲平 (E-mail: tsuchite@fc.ritsumei.ac.jp)



pp. 62–79

Report

Lecture Record: *Autoethnography Mapping: A Map for Understanding Research Approaches That Start From the Self*

Published: March 31, 2026

Teppei Tsuchimoto (Ritsumeikan University)

Abstract

This paper is a record of a lecture on the book *Autoethnography Mapping: A Map for Understanding Research Approaches that Start from the Self*, which was delivered at the 26th Public Reading Seminar of the Center for MONODUKURI Qualitative Research at Ritsumeikan University on 30th October 2025. Autoethnography (AE) is a methodology that connects personal experience with cultural context. It emerged in response to the crisis of representation. AE enables researchers to critically and reflexively explore their own experiences and those of their ‘people’. Since the 2000s, a variety of approaches have emerged, including evocative, analytic, critical and collaborative, making it challenging to grasp the landscape of AE. This lecture introduced the concept of ‘mapping’ from the book of *Autoethnography Mapping*, positioning various approaches on a two-dimensional coordinate system. The mapping uses a horizontal axis of ‘communality–uniqueness’ and a vertical axis of ‘justice and transformation–discovery and generation’. These axes are further decomposed into component dimensions—‘expression–actuality’ and ‘social practice–emergence’—thereby visualising relationships among the eight major AE approaches. The lecture also covered the historical development of AE, the two-year collaborative mapping process undertaken by the three editors, and the central concept of ‘expression rooted in one’s own life’. The AE map gave participants a bird’s-eye view of the diverse AE landscape, emphasising that mapping serves as a guide rather than a rigid classification structure. Importantly, this mapping is not a taxonomy, but a dynamic tool for understanding the terrain of AE research.

keywords: autoethnography, mapping, expression rooted in one’s own life, own people, subjectivity and science

Correspondence concerning this article should be sent to:
Teppei Tsuchimoto (E-mail: tsuchite@fc.ritsumei.ac.jp)

本報告は、2025年10月30日にオンライン上で開催された「第26回ものづくりと質的研究センター読書会」における講演の記録である。本講演では、『オートエスノグラフィー・マッピング：「私」からはじめる研究手法を知るための地図』（土元 哲平・桂 悠介・サトウ タツヤ 編，新曜社，2025）を取り上げ，オートエスノグラフィー（Autoethnography，以下 AE）という研究アプローチの全体像と，その拡がりを理解するための「マッピング」の考え方について解説を行った。AEは1970年代に生まれ，研究者自身の経験を通して文化や社会を理解しようとする方法論ないしアプローチであるが，2000年代以降，喚起的 AE・分析的 AE・批判的 AE・協働的 AE など多様なアプローチが展開され，その全貌を捉えることが困難になっていた。本書で提示したマッピングは，こうした多様なアプローチの全体像を俯瞰的に理解することを可能にする。本講演録では，マッピングの読み方，各軸の意味，AEの歴史的背景，そして現代における意義について，できる限り講演時の語り口を残しながら整理した。なお，本報告の編集にあたり，講演やスライド内容の一部加筆修正を行っている。

I 自己紹介と研究関心

立命館大学の土元哲平です。本日はお招きいただきありがとうございます。今回の読書会では、『オートエスノグラフィー・マッピング』（土元・桂・サトウ 2025）を題材に，「一冊を通して全体像をつかむ」ことをねらいにします。各章の細部に深く入り込むというよりは，マッピングの発想と枠組みを軸に，AEの見取り図を共有したいと思います。

私は文化心理学・キャリア研究を基盤に，いくつかの隣接領域を横断しながら研究してきました。学部時代には，鹿児島大学で物理学，特に人工衛星に関わる研究に携わり，その後，教育

学を経て文化心理学に出会いました。博士課程後期過程では，自身のキャリアが転換してきたプロセスについて AE を用いて検討し『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』（土元 2022）という著書を刊行しています。さらに，立命館大学における文化心理学者ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）先生の集中講義がきっかけで「庭」をめぐる研究にも関わりましたが，その書籍中でも何名かの方が AE を実践しています（Tsuchimoto 2024）。私の関心は，キャリアの移行と転機，美的瞬間，質的研究における詩的・ビジュアル的な方法論などにあります。トピックは様々ですが，根底には「自然と文化の関係性」への問いがあり，そこから派生した問いを探究しています。

II オートエスノグラフィーの「わからなさ」と「科学の声」

参加者の方は，AEにこれから取り組もうとされていたり，すでに取り組んでみて分からない点や疑問が出てきたり，あるいはタイトルだけを見て関心を持たれた方など様々だろうと思います。そこで一解説されていない用語も含みますが—ひとまず AE の輪郭を描き出しておこうと思います。

オートエスノグラフィーとは，個人的経験と文化的文脈とを結びつけるものである。表象の危機¹⁾を経て，「現実を客観的に描く」ことが本来的に不可能であることが明らかになった。一方で，社会科学において，志向性や情動的なもの，主観的なのが再注目されてきた。オートエスノグラフィーは，こうした流れの中で生み出された，「研究者が主体的に自身や，仲間の人

1) 表象の危機については、『オートエスノグラフィー・マッピング』の「3-1 批判的 AE」を参照。なお，以下の注における参考文献は，特に断りがない場合は同書を指す。

びと (own people) の経験を対象に研究する」方法論ないしアプローチ（現実への接近の仕方）である。

ただし、このように AE を説明したとしても、以下のような疑問が投げかけられることがあります。

- ・「個人的経験と文化的文脈を結びつけるって、どのように“結びついた”と言えるんですか？」
- ・「その結びつけ方も、“主観的”じゃないんですか？」
- ・「客観的じゃないものって、“科学”じゃないですよね？」
- ・「中身だけ見ると、日記？ エッセイ？ これは論文ですか？ 自叙伝とどう違うんですか？」

こうした疑問は、ほとんどが実証主義的な前提から生まれています。AE を実践していると 2000 年代以降の諸分野（質的心理学など）の転回にかかわらず、やはり「客観的じゃないものは科学じゃないですよ」という実証主義的な「科学の声」は根強く残っていることを痛感します。AE は、表面的な「スタイル」や「対象」だけでなく、認識論・存在論・方法論を問題にしているので、その根底を理解しなければ、こうした疑問に正面から答えることは難しいのです²⁾。

実証主義的な「科学」、あるいは客観的であることが正しいとされる論理に、私たちはしつけられ (disciplined) ており、盲従することがあります。こうした視点からは、AE は「弱く」見えるし、感傷的で、科学的ではないように思わせてしまうのです。もちろん科学を「実証主義的な知識の蓄積活動」と捉えた場合には、そのような数量化・他者化されない「弱さ」を持つアプローチは不要なもののみなされます。しかし、「知識」それ自体も動的かつ局所的に変容しているとみなせば「蓄積」は不可能になりますし、

科学—より広くは学問—において知的探究のパラダイムの多元性を認めるのであれば、AE の「弱さ」も一つの探究の道とみなすことができるのではないのでしょうか。加えて、特権化された「強さ」によって無自覚のうちに除外され、改変されてきた現実の側面を、文化人類学は内部から問い直してきたのです³⁾。

先にも少し述べましたが、AE は「現実を“客観的”に描くことはもはや不可能だ」という「表象の危機」を経て生まれた経緯があるため、むしろ「主観的でなにが悪いのですか？」とさえ言っていていいでしょう。あるいは、素朴に「主観性」と「客観性」とを対比させることにも批判的になる必要があります。とりわけ社会科学においては志向性、情動的、主観的なものが再び注目されています。主観性も、主体が単独で作出したものというよりも、文化的にガイドされながら他者とともに構築していくものとされています⁴⁾。その流れの中で生み出されたのが、研究者自身が主体的に「仲間の人びと (own people)」つまり自分や身近な人々の経験を対象に研究するアプローチとしての AE です (Hayano 1979)。

AE は「自分のことを語るだけ」で何もしていないわけではありません。ただ、その探究のあり方を知ろうとすると、背景が複雑に絡み合っていてよくわからない、そう感じることも多いのも事実です。海外の AE 文献を読んでも、AE が何を指しどのように探究しているのかを読み解くことは容易ではありません。そこで本書では、その複雑な部分にできるだけ正面から向き合おうとしました。本書では、異なる背景や立場をもつ先生方にご執筆いただいたことで、AE への理解を固定化・特権化することなく、各分野がどのように「科学の声」に向き合っているのかという AE の適応範囲の広さを示すことになったと自負しています。

3) 「2-1 喚起的 AE」「7-4 脆弱性」を参照。

4) 「第 1 章 オートエスノグラフィーとは」における「詩的運動」(p. 10-11) を参照。

2) 「よくある質問と答え (Q & A)」を参照。

III オートエスノグラフィーとは何か？ マッピングの魅力

さて、ここで改めてAEとは何かをご説明いたします。まず、本書の「はじめに」に書いてあることを抜粋します。

- ・論文や学術書でありながら、研究者の存在を前景化し、「私」の経験を中心に据える。
- ・単に自己の経験を描写するだけではなく、研究を遂行するなかで生じる根本的な問題への応答として提起され、関心や目的に応じて多様なアプローチとして発展してきた
- ・国内外問わず人文社会科学における一つのアプローチとして注目されつつある。とりわけ英語圏では、もはやAEのアプローチを「試みる」などと断る必要はなくなっており、自身の経験や感情を研究対象とした論文が当たり前のように登場している。
- ・狭義の研究手法をこえ、教育やコミュニティワークの一環など社会的な実践として用いられるようになってきている。
- ・様々な国・地域のオートエスノグラファーが自己の経験をいかに自己省察的、詩的、政治的、そしてパフォーマンスに問い、表現するのかについての対話を広げ、実際に多彩な研究成果や作品が発表されている。

続けていきましょう。第1章では次のように記述されています。

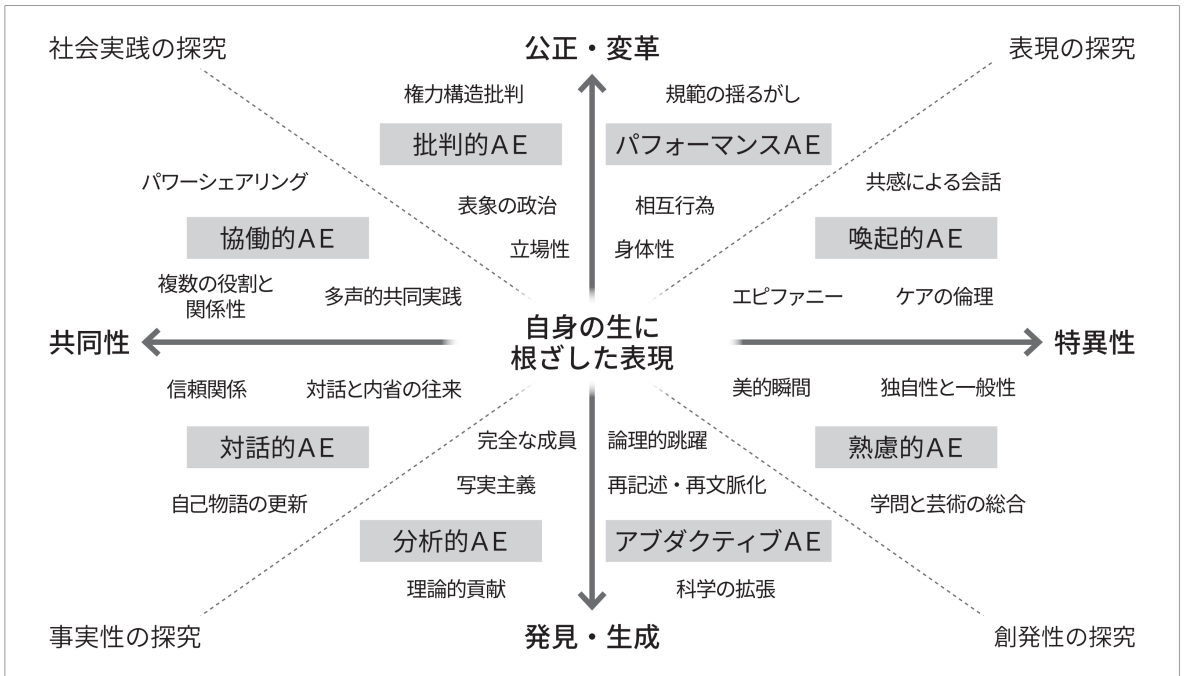
- ・1970年代にエスノグラフィーから派生したアプローチであり、研究者の主観性を文化（人びと）の理解に結びつけることに関心を持つ。
- ・ある記述がAEであるのかエスノグラフィーであるのかは、書き手としての研究者（やその周囲の人びと）が、いかに意図

的・省察的に表現されるかという質的な観点から理解できるだろう。

- ・AEには研究者の主観性、表現や表象、テキストを書くことと読むこと、研究プロセス、研究の目的など、様々な考え方が関係している。
- ・AEは2000年代以降、その発祥である文化人類学や社会学のみならず、様々な社会科学において広く用いられてきた。
- ・「AEが主観的な（あるいは内部者としての）経験を扱える」という理由のみで、当該分野における可能性を指摘するような論考も少なからずある。
- ・「主観性」（autoの部分）を理解することはAEにとって重要な側面であるが、この点がAEの特徴として過度に強調されていることは、問題点の一つ
- ・AEの議論においては、「研究者を取り巻く人びと」（own people）の経験に対する、様々なアプローチが生み出されてきた。
- ・記述が「AEであるのか、そうでないのか」「それがどのような種のAEなのか」を考えるための一般的な枠組みは現状においてほとんどなく、AEがどのような人間理解を目指しているのかという本質的な点が理解しづらくなっている。
- ・特定の経験から独自の知・表現を創造し、他者と生きる現実を理解したり、働きかけたりする

このように記述だけを捉えると非常に複雑に思えますが、こうした細かな説明をしなくても一目で分かるのが、この「オートエスノグラフィー・マッピング」なのです！（図1）つまり、AEについて様々な議論や、その歴史がありますが、「AEとは何ですか？」と言ったときに、「この地図全体がAEです」と言えるのです。そうした思いがこの本一冊に込められています。

図1 オートエスノグラフィー・マッピング



(土元・桂・サトウ, 2025, p. 14; 編者及び出版社の許可を得て転載)

IV マッピングの読み方と注意点

このマッピングを具体的に説明する前に、注意すべきポイントを第1章で述べていますので、そちらを確認しながら先に進みたいと思います。まず、今回作成したマッピングは、AEの多様なアプローチをマッピングしたもので、2000年代以降現れてきた様々なアプローチが位置づけられています。AEの議論においては、「喚起的なものだけがAEだ」という立場の方もいますが、私たちはAEには多様なアプローチがあるという前提を取っています。それから、今回の3人の編者で何回も繰り返し位置づけながら完成したものです。これは後ほどお示しします。

マッピングの両極ですが、これは対比ではな

くて「相補的な」対です⁵⁾。あくまで対比を強調してAEを分離するというは私たちの意図ではありません。さらに、AEのマッピング自体は、AEの全貌を「ありのままに」描き出そうというものではありません（これはエスノグラフィーの議論からしても不可能です）。AEマッピングで描かれる種のAEのみが、AEの全てではないということは、余白として残しておきたいと思っています。

今回、指定質問をしていただく楠見友輔先生は、ドゥルーズとガタリの議論を参照にしながら

5) 相補性 (complementarity) は物理学者ニールス・ボーア (Niels Henrik David Bohr) にルーツがある概念であり、異なる条件のもとでは、一見矛盾する2つの事象が観察されるものの、それらの事象が、現実理解を補い合っていることをいう (例えば、「光は波である」と「光は粒子である」)。相補性の例には、ボーアのいとこであるルビン (Rubin, E.) による、「ルビンの壺」と呼ばれる反転図形がある (Rubin, 1921; サトウ, 2013, 2020 参照)。

ら、「マッピング」は、写すべき対象を正確に写し取るという「トレーシング」とは異なり、創造的にデータを変換していくことであるとご著書の中で書かれています（楠見 2024）。私たちも、マッピングすることによって、いかに今見えている AE の景色が新しい枠組みとしてどのように生まれるのか、そこの生成に賭けている部分もあります。参加者の皆様も、このマッピングが絶対的なものであると捉えず、ぜひ新しいマッピングを立ち上げていただければと思っています。

私たちが作り上げたこの地図・マップはあくまで 1 バージョンであり、—何度も言いますが—これは「分類」ではありません。ですから、「土元・桂・サトウによれば、AE をこのように分類している」などとは決して書かないでください……。マッピングしている、あるいは位置づけているという書き方をしていただくとありがたいです。むしろ、AE という総体の中でのいくつかのアプローチの関係性がどのようにあるかということの特徴づけること（関係づけ）、それによって AE 全体をより深く理解できるよう

にする—ここを目指していますので、そのように読んでいただければと思っています。

このマッピングの過程ですが、最初に始めたのが 2023 年の 8 月でしたので、およそ 2 年がかりでマッピングを進めてきました（図 2）。毎月 1 回、編者で集まりマッピングについて話し合い、時々メールで意見交換をしながら進めていったのですが、こうした試行錯誤を経て、最終的に完成したマッピングが本書の図になります。

やはり作っている本人は分かりますが、捨象した次元があります。どうしても最初に作った次元や構想が、AE のアプローチをマッピングしている間に、抜けていったり、A と B の両極を設定したら C と D の両極は採用できない、というように、位置づけの中でどうしても描けなかった部分もあります。最終的に目指したのは、AE の全体像を整理するのに適切な、独立した次元を設定することでした。

もちろん、知識や理解は常に進化し続けるものであり、このマップ自体も変化し続けるものであると、サトウ先生が「おわりに」で書かれています。また、マッピングは、静態的な図柄では

図 2 マッピングの過程



なくて、思考や学習の過程で私たち自身も継続的に更新され発展していくようなダイナミックなツールなのだとのことです。したがって「地図の“描き方”」だけでなく、地図の「読者の“読み”」によって知が生成するという側面が重要です。AE マップは完成品としての図ではなく、継続的に更新される地図づくりのプロセス(mapping)の微分として理解されるべきものなのです。さらに、将来的な「AEの進展による“地形”の変化」によって新たな地図が要請されることもあるでしょう。

本書の「はじめに」は、会話形式で始まっています。参考にしたのはエリスとボクナー(2000/2006)のハンドブックの章であり、この会話の中に、上述した「マッピングをどう読みたいか」という編者らの声を埋め込んでいます。

話が少し変わりますが、実はこのマッピングの前提、あるいはきっかけの一つになった、AEの方法論についての論文があります(土元・サトウ 2022)。これが2022年に対人援助学会から刊行された論文ですが、ここでも似たような類型化をしました。ただし、この論文と異なるのは、当時は「方法論」という切り口で見ていたということです(今回は「アプローチ」)。もう一つは、今回のマッピングには、デュオエスノグラフィーは含まれていません。デュオエスノグラフィーは、AEに類似するアプローチなのですが、あくまで「私」が「私の経験」を描くというところを主にした時に、デュオエスノグラフィーは外しておきましょうと—本当に最後まで悩みましたが、そのように決まりました。土元・サトウ(2022)の類型化とマッピングは、構造的には類

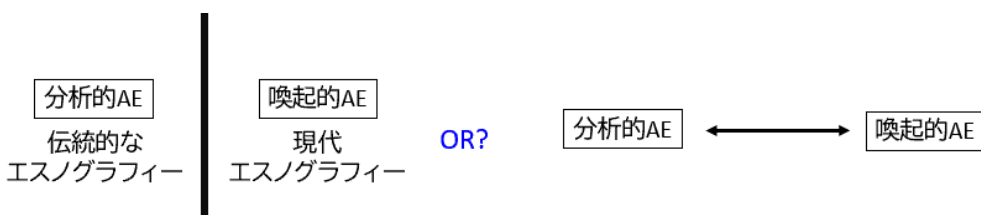
似していますが、軸の設定方法に違いがあり、前者は方法論の中でも「研究姿勢」「著述」という二次元で描いています。ですので、AEマッピングは、これとは異なり、より広く「現実への接近の仕方」という視点から見たときのマッピングをしている、と考えていただければと思います。

V オートエスノグラフィー・マッピング以前の地図

私たちは2010年代以降のAEの拡がりを認識した上で、そのアプローチの多様性をマッピングしています。それとの関係で、以前はどのような「地図」だったのかということが重要になります(図3)。

まずAEはエリスとボクナー(2000/2006)による「喚起的AE」(当時は「喚起的」という言葉は付いていなかった)を節目として発展したといえます。その後、アンダーソン(2006)により「分析的AE」なアプローチが提出されました。この2つのアプローチは、しばらくの間主流であったのですが、両者の分断もありました。例えば、Ellis & Bochner(2006)などは、分析的AEは写実主義的・実証主義的であるために、AEとはみなせないという主張をしたこともありました(図3の左)。つまり両者の間には明確な境界がありました。他方、より穏当な立場の研究者は、AEには喚起的なものと同様に分析的なものもあって、全てのAEはこの連続体(スペクトラム)のどこかに位置づくのだ、と捉えることとなります(図3の右)。ですから、AEの全

図3 AEのかつての地図(2006年の分析的AE提唱～2010年代)



体性を捉えることができる次元があるとすれば、それは、これまでは1次元（科学的-芸術的、実証主義的-物語的など）しかなかったということになります。つまり当時は、「喚起的AE」「分析的AE」以外にも様々なAEのアプローチが提案されていたのに、それらを位置づける枠組みがなかったわけです。オートエスノグラフィー・マッピングは、こうした背景をもとに、喚起的-分析的の次元を「表現の探究-事実性の探究」の成分として相対化しながら、AE全体を新しい2次元で切り開き、多様なAEを対等に位置づけたところに一つの価値があります。

VI マッピングの軸について

ここから、マッピングについて詳しく見ていきたいと思います。まず横軸ですが、「共同性」と「特異性」としました。つまり共同性を重視するAEが左側の4つのアプローチ（批判的・協働的・対話的・分析的）で、自らの経験の特異性、特別性、一回性、独自性を重視するのが右側の4つ（パフォーマンス・喚起的・熟慮的・アブダクティブ）です。

縦軸は、「公正・変革」と「発見・生成」としました。公正はむしろ「抵抗」(resistance)という語でも良かったのですが、協働的AEが公正性を重視している側面もあることから、公正としました。抵抗は、「変革」のニュアンスとも関わるのですが、「変革」には自分自身や社会を変えていくために自らの物語を用いるという意味合いが込められています。マッピングの見方としては、「公正・変革」を重視しているAEは上の4つのアプローチ（喚起的・パフォーマンス・批判的・協働的）であり、「発見・生成」は下の4つ（対話的・分析的・アブダクティブ・熟慮的）ということになります。なお、各AEの説明については、本書に譲りたいと思います。図の見方を引き続き確認していきましょう。

この二軸を成分に分解したときに、1つの成分が「表現の探究」か「事実性の探究」か、ということ。「表現」(expression)はある意味古い、平易な言葉に見えるために、「表象」(representation)の方がいいのではというご意見もいただいたことがありましたが、AEでは、むしろ「表象」への問い直し（「表象の危機」）を受けて、研究者が主体的に自らのライフを創造していくという動きの中で再考された「表現」のほうが適切であると私は思います。もう一つの成分は、「社会实践の探究」か「創発性の探究」になります。

分解した成分によって構成された次元についても、アプローチの位置づけ方は同様で、「表現の探究」を重視しているのは右上の4つのアプローチ（批判的・パフォーマンス・喚起的・熟慮的）、「社会实践の探究」は左上（パフォーマンス・批判的・協働的・対話的）。「事実性の探究」は左下（協働的・対話的・分析的・アブダクティブ）、「創発性の探究」は右下（分析的・アブダクティブ・熟慮的・喚起的）と、極に近い側に適切なアプローチが配置されるようにしながら、AEの全体性を理解できる次元を提案しています。

今回、「マッピング」シリーズの他の書籍と異なっているのは、各AEに関連するキーワードを入れていることです。他のマッピングでは、もう項目や概念が多いので、マッピングでは、それぞれの項目の関係を配置しますが、今回は8種類のAEのアプローチを配置しています。なお、各AEの関連キーワードについては、隣接するAEに親和的なものが近くに配置されるようにマッピングされています。これらのキーワードは、著者の先生らにそれぞれ提案していただいたり、私たち编者からも提案したりしながら作り上げたものになります。

AEのコア、マッピングの中央に何を入れるかということも、出版直前まで悩みました。『質的研究法マッピング』（サトウ・春日・神崎 2019）などですと、中央に「経験」が入っているので

すが、AEでは単なる「経験」というだけではなく、自分のライフ（生）を描いていく—この「表現したい」「探究したい」「変えていきたい」といった、きわめて情熱的な部分があるのではないかと思うのです。そこは編者の間で共感していたので、最初は「情熱」でもいいのではないかとか、あるいは「衝迫」「衝動」といったものかどうか、などと相談しながら最終的に確定したのが「自身の生に根ざした表現」でした。

AEにおいては「自身の生に根ざした表現」を出発点として、「公正・変革」や「発見・生成」を目指すのですが、その表現において「共同性」と「特異性」のいずれを強調する方向性も可能です。さらに、その中で、どのような側面を探究するのかによってアプローチが変わってくるということになります。とはいえ、これらのアプローチは、違いに分離独立しているものではなく、どれか一つを選ばないといけないというゲームではありません。それぞれを組み合わせたり（カテゴリ化した図ではありませんから、そもそも組み合わせるという発想自体矛盾しているのですが）、あるAEが「特異性」の4つのアプローチ全体に関連しているとか、それぞれ重っていても問題ないということです。あくまで、読者の皆さんが、どのアプローチなら自身の研究と相性が良さそうか、というところを考えていただくときの見取り図として、参考になればと思っています。

本書の目次順としては、「喚起的AE」から反時計回りに掲載されていますので、冒頭から順番に読んでいくと、基本的な考え方が理解しやすいと思います。スタート地点である、喚起的AEが、AEの議論においてはもっとも重要なポイントになります。喚起的AEを最初に理解した上でその他のアプローチを知っていただくという形の構成は最初から考えていたため、喚起的AEが第一象限にくるようにマッピングの図全体を回転させています。

なお、先ほど「喚起的なのか分析的なのか」と

いう一次元的な理解がかつてあったというお話をしましたが、この二者を最初は両極になるように設定して、そこに関連するアプローチを位置づけつつ軸も検討していきました。そうしていく中で新しい次元が立ち上がると、これまで考えていなかった新しい象限が見出されたりするわけで、その領域において、「こんな新しいアプローチも可能では？」と新たなAEを立ち上げたりもしました（アブダクティブ・熟慮的）。

これはまさに地図作り（マッピング）というプロセスの中でこそ生まれる「遊び」の部分ともいえます。編者らは、自らが取り組んできた独自のAEもある中で、AE研究の流れもある—この全体性の中で、どのように地図を描いていくかということや常に考えながらやっていたということです。これらについても、AEの新しいあり方として気に入っていただける方がいれば、実践していただければと思っています。

VII オートエスノグラフィーの基本的な考え方

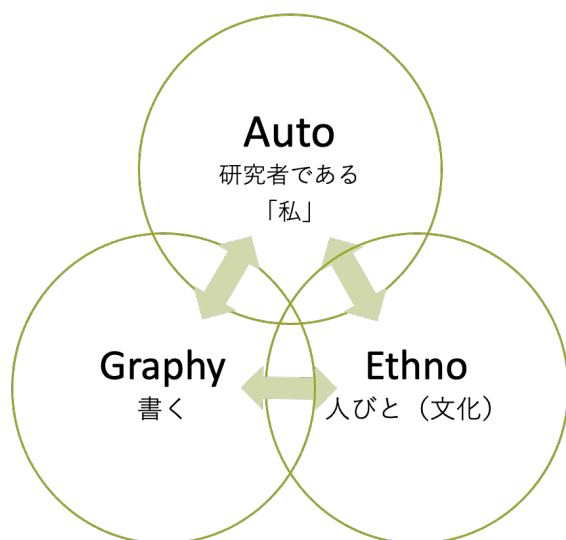
ここまでマッピングについて紹介させていただきましたが、ここからは、AEの基本的な考え方をご紹介します。まず、私がよく引用しているAEの定義は、以下のものです。

オートエスノグラフィー的なプロジェクトとは、「自分らしさ・主観性・個人的経験」(auto)を、ある1つのグループあるいは文化における「信念・実践・アイデンティティ」(ethno)の「記述・解釈・表象」(graphy)を行うために用いるものである。(Adams & Herrmann, 2020)

これは『Journal of Autoethnography』創刊号において、巻頭言に書かれていたものです。オート、エスノ、グラフィーという3つの要素を、広がりを持って定義した必要十分なものだと思います。オートというのは研究者である私、エス

ノというのは人びと。そして、私と他者を結びつけるために書く（グラフィー）ということです（図4）。AEでは、どうしても「エスノグラフィー」との対比で、オートの部分に注目が集まりがちですが、書く、ということも重要なコアなのです⁶⁾。

図4 AEにおける3つの重要な要素



私がいつも強調していることとして、「オート」エスノグラフィーは「自己」エスノグラフィーではないという点があります。それは、AEという語を初めて体系的にまとめたハヤノ(Hayano 1979)が、AEを「own peopleのエスノグラフィー」と定義しているためです。ちなみに、これがエリスとボクナー(2000/2006)という、AEでは非常に有名な先生に引用されたのですが、邦訳書ではハヤノの「own people」という引用箇所が「自分自身の」と訳されていて、それが誤解を招いた部分もあります。確かにこの語は「自分自身の」とも訳せるのですが、ハヤノの文脈で言うと、own peopleとは、カードゲームをして過ごす仲間に対する記述を指すように、仲間の人びとあるいは自分たちの人びと

と訳すことがおそらく適切だと思っています。なお、AEの文脈では、エリスらは「親密な他者」(intimate others; Ellis 2007)という表現を用いることがあります。

自分だけでなくて周囲の人々とか親密にしている仲間、家族、友人、恋人……そういった人々を書くエスノグラフィーなのだということは、明らかに倫理的態度—関係的倫理—を要請します。描く対象である「他者」をサンプルのように操作的に扱うのではなく、人間的に、「私」と関わる人として描くという姿勢が重要です。翻って、自分を描くということも、結局、周囲にある他者を描くことなのです。そうすると、AEで描かれる「私」は、「自己」というよりも、広く捉える必要があると思っています。私は「オート」を好んで使っています。もちろん文脈によっては「自己」の方が分かりやすい、「自己」概念自体も一枚岩的なものではないなど、様々な背景がありますので、私自身、使い分けはしますが、AEについて言及する際には、できる限り「オート」を推したい、ということです。

私が考える「オート」の意味の半分は、一般的な意味での主体的な自己である「私」を指すのですが、もう半分は「おのずから」動き出すような、必然性なのです。それは、自分が出会った世界や他者、自分自身を描かざるを得ないという衝動そのものだと思います。このような書き手の主体性としての自己に限定する理解を相対化し、世界と結びついた曖昧な主体の自律性としての「オート」を考えていく必要があります。したがって、私は以下のようにAEを説明したことがあります。

オートエスノグラフィーの対象は狭い意味での「研究者自身の経験」に限定されるものではなく、「研究者を含むシステムの経験」(つまり、他者を含む)を指す。したがって、オートエスノグラフィーにとって重要な点は、研究者が有している(own)文化—それは個人が有する文化だけでない

6) 「6-1 探究の方法としての『書くこと』」を参照。

く、他者と共有する文化もある—を理解することであり、その理解のために自ら動く(auto)ことであると考えられる。(土元, 2020, p. 289)

なお、この定義は、「文化が人に属する」と考える文化心理学の観点から定義したものです。ここで用いた「有する」という語は、文化を固定的・静態的なものとみなす見方にも繋がりがねないため、注意が必要です。文化心理学においては、文化とは、所有しているというよりは、自己と世界との関係づけ(relating)のプロセスであると言った方がより適切です(Valsiner 2014/2024)。

VIII オートエスノグラフィーの歴史

さて、ここからはAEの歴史についてお話ししたいと思います(図5)。1979年のハヤノの論文が、AEの歴史の開始地点になっています。この時期は、社会科学の領域において主観性、個人的ナラティブ、内省(省察、再帰性、リフレクシヴィティ)が重視されはじめた時期でした。その中で、エスノグラフィーという方法に対して『文化を書く』(クリフォード・マーカス 1986/1996)

という書籍は衝撃を与えました。後ほど紹介しますが、文化人類学における内部の方法論批判であり、「文化を書く」という営みそれ自体を問い直す契機となりました。後ほど紹介します。

これを受けて、1990年代からは「現代エスノグラフィー」の領域でも非常に多くの実験的な取り組みがなされていたのですが、とりわけエリスとボクナーが筆頭になって実践されたのが、AEという研究者自身を描くアプローチです。この当時はあまり知名度としては高くなかったと思いますが、2000年代になり、『質的研究ハンドブック』の第2版にAEの章が含まれた(Ellis & Bochner 2000/2006)ことがきっかけで国内外での認知度が上がりました。

このAEの章は、エリスとボクナーというこの2人が、「AEの物語としてAEとは何かを説明する」ということをやっています。つまり、物語の中に理論が組み込まれたり、文献レビューが組み込まれていたりします。例えば、研究室でハンドブックを書こうとしているエリスとボクナーの二人が、ハンドブックという規定づけられた文体でAEを紹介するのは、あまりふさわしくないよね、といった話をしたり、研究会の場面でAEに対する批判がなされたり、院生さんが研究室を訪ねてきたり……というように、

図5 AEの歴史

1970年代後半～

- 1979年 [Hayano](#)が「オートエスノグラフィー」を提唱
- 社会科学の様々な領域で個人的ナラティブや、主観性、内省の意義が主張される。
- 1986年 『文化を書く』出版

1990年代

- [Ellis](#)や[Bochner](#)らが筆頭となり、オートエスノグラフィーの著作が生み出される。

2000年代

- 2000年 『[The Handbook of Qualitative Research \(2nd ed.\)](#)』にオートエスノグラフィーの章が含まれる。(Ellis & Bochner 2000/2004邦訳)
- 2013年 『[Handbook of Autoethnography](#)』
- 2020年 学術雑誌 『[Journal of Autoethnography](#)』

日常のストーリーの中に「AE とは何か」が練り込まれています。だから、理論に詳しくなくてもストーリーを読めますし、AE に対する理解が深まってから再度ストーリーを読むと、さらに深く読み込めるようになるという大変面白い章になっています。その後 2020 年には学術雑誌が創刊されました。この雑誌自体は、定期購読が必要となっているのでややアクセスしづらいのですが、これに限らず近年では様々な学術雑誌で AE の特集が組まれています。

IX 現代エスノグラフィーの課題

もう一つ背景としてお伝えしたいのが現代エスノグラフィーの課題（AE は何と向き合っているのか）です。AE に挑戦したいという人の中には、自分の経験を語りたい、研究の形にしたいという方が多いですが、何のために自分の経験を語るのか、あるいは語る時に何を気をつけた方がいいのか、ということについては、AE の出発点である以下の議論が参考になります（図 6）。

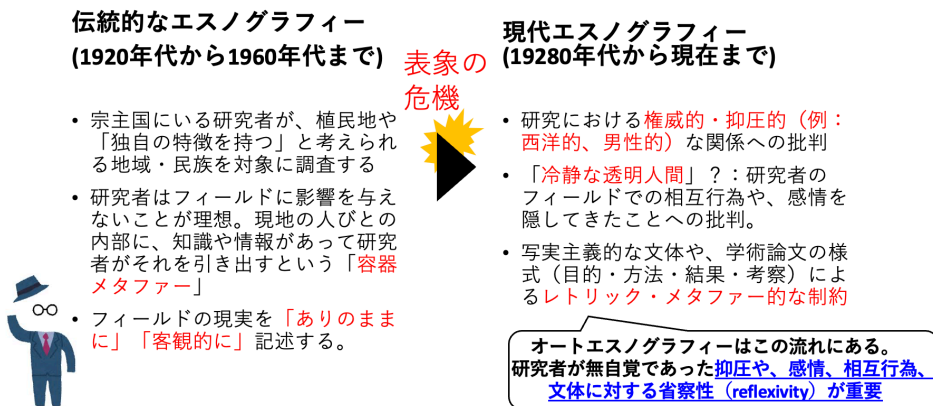
文化人類学において、「伝統的なエスノグラフィー」（1920 年から 60 年代ごろ）では、宗主国にいる研究者が植民地や独自の特徴を持つと考えられる地域や民族の対象者を研究してきました。その時、研究者はフィールドに影響を与

えないことが理想であり、これが「客観的」という言葉に凝縮されてきました。そこでの調査は、現地の人々の内部に知識や情報があって、研究者がそれをできるだけそのまま取り出す、という「容器メタファー」を暗黙に採用していました。このとき、研究者はフィールドの現実をありのままに客観的に記述することが理想とされていたので、研究者は透明人間のように、あるいは壁の花のように、できるだけ対象者に影響を与えないように調査することが目指されていました。

これが「表象の危機」によって問い直されるのですが、こうしたスタンスに疑義が生じるようになり、1980 年代から現在までは、かつてのエスノグラフィーの方法論が問い直されるようになっていきます。つまり、そのような調査のあり方では、研究者と対象者という権威性や抑圧的な関係性、生じていたはずの感情や相互行為について、十分に扱ってこなかったのではないかと、という批判がされるようになってきます。

例えば、研究で生み出された知識であれ理論であれ、西洋的、男性的な研究者のまなざしが見落とししたり、抑圧したりしてきたものを探究するという視点から、ネイティブ・エスノグラフィーや、フェミニスト・エスノグラフィーなどが誕生してきます。さらに、「フィールドに影響を与えないということはあるのか」とい

図 6 伝統的なエスノグラフィーと現代エスノグラフィー



う点に疑義が呈されるようになります。研究者が「問う」ということ自体、一方的な情報収集ではありえず相互行為の産物であるし、研究者自身が「客観的に」描いている裏には、フィールドに対する感情や葛藤が少なからずあるのです。加えて、「ありのままに描く」ということが果たして可能なのかということも問題になります。「書くこと」それ自体が現実を構成するという立場に立つなら、写実主義的な記述は文体やレトリックの産物にほかならず、ひいては学術論文という様式そのものが、現実の描き方を制約しているともいえるのです。

ちなみに、本書『オートエスノグラフィー・マッピング』が出る前は、私はAEの初学者には『現代エスノグラフィー』という書籍をよく紹介していました。この本で紹介されている整理が分かりやすいですので、紹介します。『文化を書く』の序論「部分的真実」におけるクリフォードが挙げた論点（藤田 2013）は、現代エスノグラフィーの出発点になっています。

- ・書き手は意図的に取捨選択をしている
- ・記述自体がレトリックの制約を受けている
- ・調査する側と調査される側の間には非対称的な権力関係が存在する
- ・文化人類学という学問は「西洋」の権威を前提に成り立っている
- ・民族誌は、書き手が誰であり、どのような制約下にいるのかに影響される
- ・民族誌の真実とは、本質的に「部分的真実」である

これが「表象の危機」の課題と直結するわけですが、AEでの考え方はこれを受けてどのように「書くこと」を考えるのでしょうか。

1点目として、研究における「書き手」（主体・主観性とも言い換えられる）を排除することには限界がありますし、原理的に不可能です。現代エスノグラフィーやAEは、そうした書き手の存在やエージェンシーを取り除くのではなく前

提として認めます。認めた上で—つまり研究者の存在しない研究はありえないわけで—むしろ、書き手＝主体と結びついている文脈に対して内省的になることが重要だというスタンスをとっています。そもそも客観的な記述を目指すということ自体は一つの立場に過ぎないので、書き手の主観性を認めたとしても一つの立場であるわけです。この「内省」をより強調しているのが分析的AEです。

2点目ですが、科学や研究が用いているメタファーや文体に対する問い直しがあります。ここでは、科学論文の構造や言い回しが、知識の探究を狭めている側面があるという見方をとります。例えば、私たちが科学論文を書くときに、知らず知らずのうちに従っている「先行研究では～が不足している」「～については検討の余地がある」という「空白を埋めるべき」だというメタファーや、「何々を明らかにする、明らかにした」という「見えないもののベールを取る」「明るみに出す」というような発見のメタファーがあります。こうした言語は、暗黙の「知識観」を作り出します。つまり、ここでは未知の領域を発見することでギャップを埋め、曖昧であったものを明確にすることで「知識の全体」を満たしていく、というような見方が作られていて、曖昧な余白や知識の流動性が許容されないのです。すでに明らかになった知識は固定的で不変のもののみみなされるので、「蓄積していく」ことが可能になります。「未知の領域」は発見される前から人類の前に共通に存在しており、それを埋める誰かがいる—そうした営みとしての「科学」が前提とされているということになります。文化心理学のヤーン・ヴァルシナーも、しばしばこのような「蓄積的な科学」に対して警鐘を鳴らし、「ナノ心理学」(Valsiner 2018)のような提案をしています。まさに「知識観」の次元から科学を問い直さないといけないということを、喚起的AEは強調しているのです。

最後に、3点目です。私たちは、一般的には、

「読む」という行為を著者の主張や意図を正確に理解するというところに狭めて捉えています。これは、国語や美術教育などを通して受験対策的な「読み」を訓練されていると、どうしても書き物には「著者の意図がある」ことが前提とされていて、「正解」の表現や解釈が一意に決まると考えがちです。しかし、テキスト論の文脈で言うと、テキストは引用の織物であって、必ずしもその起源は著者自身にあるわけではないのです（「作者の死」（バルト 1979）を参照）。書いた本人にも、いつのまにか書いていたということが起こるわけですし、解釈のあり方も多様にあり得るのです。

テキストの意味づけが読者に委ねられるとすれば、「論文」は、どうなるのでしょうか。テキストが「読む」という読者の行為を引き起こし、それによって意味生成がなされる側面があるなら、現在の論文の標準的なスタイルはどのような意味生成を引き起こすのでしょうか。このように考えると、これまでの科学論文は「対話の触発」という観点では描かれないモノログ的なテキストでした。作者がテキストを書き上げるまでを研究と考えていたのです。AEでは、読む過程における意味生成、テキストと読者との対話による知の生成まで含めて研究として捉えていますし、それがエリスとボクナーが重視していることの一つです。喚起的AEでは、読者が手に取りやすく、テキストとの対話に入ることを誘い、読者の感情を喚起するようなストーリーを書きますが、それは読者の意味生成を豊かにするという表現の探究に向かっているためです。AEが、他のエッセイと異なるのは、表面的に把握可能な表現のレベルだけでなく、その奥にある哲学的な深みにあるのだといえます。

X オートエスノグラフィーの意義

ここまでの内容を整理すると、AEが向き合っ

ているのは、伝統的なエスノグラフィーの記述が、研究者の感情や権威性、言語的な制約を無視し、「客観性」という不安定な概念によって覆い隠すことで作られた「科学」や「知識観」に対する批判です。一方、AEは新しい人間理解のあり方の一つです。それは主観性や感情、表現、省察性を重視して、これまでネガティブに描かれてきた人の「弱さ」、ケアの側面などを含み込んだ人間理解を目指しています。だから主観性が必要になるし、自己の経験をよりよく描くための方法論的な工夫も生み出されています。

前節とも関連しますが、AEは「読者との対話的・共感的なコミュニケーション」（土元・サトウ 2022）を重視します。前述のとおり、「読む」という行為が「意味生成」の行為だとすれば、「テキスト」がその意味生成をいかに深めるのかという観点が重要となります。これはエリスとボクナーの言葉でいえば、AEの読者が「物語についてではなく、物語をとおして」（Ellis & Bochner 2000/2006, p. 131）自らの経験を内省したり、感情を喚起することを指します。そのときAEは、対話を開くためのコミュニケーションの媒体として位置づけられます。さらにAEは「読者が、自分の視点から、自分の生活経験に由来する観点から、対話へと参入できる」（同書, p. 148）ような物語として描かれる必要があります。ここで、芸術的な表現の意義、科学という権威性の民主化、知識へのアクセシビリティなどが関連してきます。

もはやこうした実践は科学ではない、と考える方もいるかもしれませんが、それは「科学」を狭く捉える限りにおいてであって、私たちは、これを新しい知の探究としての科学、より広く言えば学問として捉えている、ということです。だからこそ、喚起的AEは、AEの出発点にして基本であるので、他のAEを実践する際にも意識する必要があります。また、喚起的AEにおいて、物語はコミュニケーションとして「読まれ」なければなりません。AEの物語をどのよう

な姿勢で読むのかを、身体化したコミュニティの形成が重要になってきます。私が主催している「オートエスノグラフィーと詩的探究フォーラム」も、そのような意図で始まったものです。

まとめとして、AEの意義を整理します(図7)。それは第一に、「知識」のあり方を変革することです。それはコミュニケーションを通して生まれる知識であり、一人一人の中に生まれてくる知識であるという意味で、動的な知識として捉え直されます。それは、客観的で「正解」の知識が、所与のものとしてあると考えるのではなく、書くことや読むことを通して生成されるローカルな知識であると考えます。

第二に、人間理解のモードを変革することです。科学における蓄積志向の前提を退けることは、上記の知識観からすればある意味で当然の帰結です。コミュニケーションを通して知識は生まれるものであるから、蓄積はできないわけです。この点について、エリスとボクナーは、「研究のゴールを根本的に変革すること、つまり記述からコミュニケーションへと変えること」(Ellis & Bochner 2000/2006: 147)と述べています。記述するということ自体は、もちろんデータの蓄積になります。ただし、人のライフを理解するという実証的な知識は、テキストの「喚起」と読者としての「読み」の相乗効果によるものです。「今、私が喚起的に書く」ことは、次の世代の知につなげるために、未来の読者に向

けた対話である、という捉え方もできるかもしれませんが、それは、研究を広い時間的な視野を持ったコミュニケーションとして捉える実践ともいえるでしょう。

XI 本書の構成

ここまでAEについて解説してきましたが、最後に本書の構成について紹介したいと思います。

本書では、まず第1部でAEの基本的な考えを紹介しています。第2部ではオートエスノグラフィー・マッピングの図にしたがって、第2章から第5章までを象限に沿って紹介しています。なお、2章で1つの象限を扱う構成になっていますが、特に深い意味があるわけではありません。それぞれの章のサブタイトルは、各著者の先生に決めていただいていますので、それもキーワードとして読んでいただければかなと思います。

今回は、各章の節の構成も構造化して、「各AEの背景」「姿勢・特徴」「具体例」「結論」という流れですべてのアプローチを読み、比較できます。つまり、AEの8つのアプローチをそれぞれ同じような観点から読めるようになっています。

第3部では、AEをより深めるための重要概念を掲載しています。ここでどの概念を選定するのは非常に苦労しました—というのは、AEの

図7 AEの意義

「知識」のあり方

→静態的から動的な知識へ

※客観的で真なる値としての知識に近づいていくのではなく、「書くこと」ないし「読むこと」を通じてローカルに生成される知識を重視する。

「人間科学」の研究モード

→蓄積志向から、コミュニケーション志向へ

※「研究のゴールを根本的に変革すること、つまり記述からコミュニケーションへと変えること」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.147)

重要概念は第2部の各AEの発祥とも深く関わることがあるためです。第2部・第3部での概念の解説が充実したために第1章には、やや書くことがなくなってしまう状況でしたが、第1章では、AE全体に通底するような概念を挙げております。重要概念は、適宜注釈が付けてあり、関連項目を読んでいただくことで理解が深まるように工夫しておりますので、ご確認ください。

第6章は「記述の理論と方法」、第7章が「記述の課題と意義」ということで書いています。「6-2 重層化された説明と多面的な省察」「7-1 関係的倫理」などについて日本語で紹介されているのは貴重です。いくつかの章では、AE的に書いてくださっているので、大変理解しやすい（あるいは、理解のしにくさがよく理解できる）と思っています。第8章「関連領域」では、AEに関連する領域についてご執筆いただきました。特に、「サバルタン（8-1 ポストコロニアル研究）」や「8-3 当事者研究」とAEが接点を持ちうるというのは日本の一つの特徴だと思いますし、AEをやっているときに視界の隅にあるような学問領域をまとめて押さえられる章になっていますので、ご関心ある方も多いのではないかと思います。

最後に、「よくある質問と答え（Q & A）」という付録がありますが、これは、私のAE仲間とともに、何度かミーティングを重ねながら練り上げてきたもので、実際に研究や実践の場でリアルに立ちはだかってくる質問をまとめたものです。学会発表や論文化、倫理審査の場面で想定される問いに対して、できるだけ真正面から答える内容になっています。具体的には、次のような問いを設定しました。

- ・AEの研究プロセスはどのようになっていますか？
- ・AEはどのような意味で“研究”なのでしょうか？
- ・個人のAEと、協働的AEとでは、実施の際

にどのような違いがありましたか？

- ・個人的経験を記述することへの難しさにはどう対応すればいいでしょうか？
- ・他の研究法と組み合わせることは可能でしょうか？
- ・当事者研究との違いは？
- ・査読制度・学位論文との関係は？
- ・AEと倫理審査の関係はどのようなものでしょうか？
- ・よいAEとはどのようなものでしょうか？
- ・AEに関心を持ったり、取り組んだきっかけは何ですか？（9名への質問）

このQ & A執筆者の9人それぞれが、AEと出会ったきっかけについても書いていますので、そこも参考になるかもしれません。手前味噌ではありますが、修士論文や卒業論文に取り組む学生にとって、AEを始める一つのきっかけになったり、取り組み方を考える際のヒントになったりするのではないかと思います。

以上で本書の紹介を終えたいと思います。ありがとうございました。

XII 引用文献

- Adams, T. E. & Herrmann, A. F. (2020) Expanding our autoethnographic future. *Journal of Autoethnography*, 1 (1), 1–8. <https://doi.org/10.1525/joae.2020.1.1.1>
- Anderson, L. (2006) Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 373–395. <https://doi.org/10.1177/0891241605280449>
- Clifford, J. & Marcus, G. E. (eds.) (1986) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. University of California Press.
- 春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子（訳）（1996）文化を

- 書く. 紀伊國屋書店.
- Barthes, R. (1968) *La mort de l'auteur*. *Manteia*, 5, 12–17. 花輪光 (訳) (1979) 作者の死. 物語の構造分析. みすず書房, 79–89.
- Ellis, C. (2007) Telling secrets, revealing lives: Relational ethics in research with intimate others. *Qualitative Inquiry*, 13 (1), 3–29. <https://doi.org/10.1177/1077800406294947>
- Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000) Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Researcher as subject. Denzin, N. K. & Y. S. Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed.). SAGE, 733–768. 藤原顕 (訳) (2006) 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性—研究対象としての研究者. 平山満義 (監訳) 質的研究ハンドブック 第3巻—質的研究資料の収集と解釈. 北大路書房, 129–164.
- Ellis, C. S., & Bochner, A. P. (2006) Analyzing analytic autoethnography: An autopsy. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35 (4), 429–449. <https://doi.org/10.1177/0891241606286979>
- 藤田結子 (2013) 文化を書く. 藤田結子・北村文 (編) ワードマップ 現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践. 新曜社, 24–29.
- Hayano, D. M. (1979) Auto-Ethnography: Paradigms, problems, and prospects. *Human Organization*, 38 (1), 99–104. <http://www.jstor.org/stable/44125560>
- 補見友輔 (2024) アンラーニング質的研究—表象の危機と生成変化. 新曜社.
- Rubin, E. (1921) *Synsoplevede Figurer: Studier i psykologisk Analyse*. Første Del. Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.
- サトウタツヤ (2013) 複線径路・等至性モデル, 世界を駆ける (2) (対人援助学&心理学の縦横無尽 10). 対人援助学マガジン, (13). <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol13/17.pdf>
- サトウタツヤ (2020) 心理学史諸国探訪 デンマーク. 心理学ワールド, (89). <https://psych.or.jp/publication/world089/pw11/>
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) (2019) 質的研究法マッピング—特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社.
- 土元哲平 (2020) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 対人援助学マガジン, (43). 287–299.
- 土元哲平 (2022) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. ナカニシヤ出版.
- Tsuchimoto, T. (Ed.). (2024) *The Semiotic Field of the Garden: Personal Culture and Collective Culture*. Information Age Publishing.
- 土元哲平・桂悠介・サトウタツヤ (編) (2025) オートエスノグラフィー・マッピング—「私」からはじめる研究手法を知るための地図. 新曜社.
- 土元哲平・サトウタツヤ (2022) オートエスノグラフィーの方法論とその類型化. 対人援助学研究, 12, 72–89.
- Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology*. SAGE. サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽 (監訳) (2024) 文化心理学への招待—記号論的アプローチ. 誠信書房.
- Valsiner, J. (2018) Needed in psychology: Theoretical precision. *Europe's Journal of Psychology*, 14 (1), 1–6. <https://doi.org/10.5964/ejop.v14i1.1602>

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>